

◇心理学シリーズ S・フロイト編 <その1>

2005.05.10 タツノオトシゴ



前回はちょっと、タツノオトシゴの子どもの頃を振り返ってみました。佛教と精神医学の関係も面白そうですが、まだまだ文章にするだけの資料がありません。C.Gユングの世界からは、色々な世界との関連性が見えてきますが、「マンダラの世界」について、そのうちに書こうと思います。何しろ、大学院の修士論文テーマをまだ絞りきれていないのでタツノオトシゴは焦っています。多分高齢者分野に関連して、『福祉と建築の接点』を取り入れる事になるとは思いますが…？ 本や映画も観たいのですが、最近手を広げすぎたので時間が取れません。そんな中から“フェミニズム”に関する本を読んでいると、フロイトに関する記述が多く出てきました。当時の精神分析学では芸術論や文化論にも係わり、その後20世紀半ばのヨーロッパ思想に大きな影響を与えています。21世紀になった今日でも、S.フロイトの精神分析学は重要な位置付けにあると云われています。



S.フロイトは1856年にモラヴィア地方(現在のチェコ)の小さな村でユダヤ人の両親から生まれています。フロイトの父親が41歳、母親は21歳の若さで、父親にとって3番目の妻ということが、フロイトには理解しがたい複雑な家庭環境だったようです。フロイトが4歳の時一家はウィーンに引越し、1938年にイギリスのロンドンに亡命するまでを過しています。彼の弟子や患者の多くがユダヤ人で、「精神分析学はユダヤ人独特の学問」といわれるのを嫌い、学会の会長にスイス人のC.Gユングを指名します。フロイトはウィーンの学会では認められず、精神分析はイギリスやアメリカで広まっていますが、ナチス・ドイツがウィーンに進行したことで、多

くの学者が国外へ亡命をしました。特にアメリカに渡ったユダヤ系学者が、その後の集団援助技術分野で活躍をしていくのです。S(ジークムント)、フロイトには A(アンナ)、フロイトという娘がいますが、児童心理学や S.フロイトの『防衛規制』の考え方を体系化し、理論を発展させたことで有名です。高校を優秀な成績で卒業したフロイトは、ウィーン大学の医学部に進み、生理学研究所で“ウナギやザリガニ”の神経細胞を研究しています。最初は、生理学者になるつもりだったフロイトですが、学者を続けるための経済力も無く、恋人との結婚を考えた結果、結婚資金を稼ぐために『開業医』の道を選ぶのでした。

(案外合理主義の面があり、この辺が他の人と意見対立の原因を作っているかも?)



フロイトの精神分析理論に多くの信奉者や弟子が集まるが、その反面、A.アドラーやC.G.ユングなどと激突して決別しています。フロイトが26歳のとき、5歳年下のマルタ・ベルナイスと婚約し、結婚資金を貯める間の4年間に900通を超える手紙を書いて送った事は、彼の性格の一端を伺わせます。生活の為に開業医への道を選んだことが、後の精神分析療法を生み出すきっかけともなっています。

1907年にユングとフロイトがウィーンで会った後、幾度かの交流の中で、フロイトとユングの間は少しずつ溝が出来ていきます。二人は、無意識の存在とコンプレックスの発見という二つの点で意見が一致したにもかかわらず、『夢』に関する部分でまるで違った解釈をしています。ユングにとって、夢はロマンに溢れ、未来に開かれた壮大なものを感じさせますが、フロイトにとって『夢』とは、望んでも叶えられない願望への

抑圧された、嫌な思い出から出来ていました。それにもまして、ユングの母性的な考えに対し、フロイトの考えの根源には父性的な、場合によっては家父長的な厳しさを感じさせるのです。フロイトとユングの決別は、1914年の冬、『精神分析史』の中でユングに対する厳しい攻撃が加えられた後の事でした。

フロイトの『無意識』の背景には、子ども時代に形成される近親相姦的な人間の生理に基づく性欲によるものと考えています。フロイトは、心を動かす本能的なエネルギーを『リビドー』と呼びこれを本質的には「性的」と考えています。C.G ユングや A. アドラーは、この考え方を全面的には認めることが出来ず、離れて行く事になります。

フロイトは、自分の理論に少しずつ修正を加えて行きますが、“性的なリビドー” そのものの考えは変わっていません。皆さんは温泉地では「釜地獄」とか「海ぼうず」などと云われる光景を見たことが有りませんか？地の底から湧き出す泡と硫黄のにおい…フロイトは、その湧き出す潜在意識の根源こそが“性的なリビドー”であり、潜在意識が『夢』となって現われると考えたのです。また、「人間は何故夢を見るのか？」という疑問に対し、フロイトは、「人は睡眠を守るために夢をみる」と考えているのです。

皆さんは「レム睡眠」という言葉を聞いたことがありますか？人間はこの「レム睡眠」の時に眼球が忙しく動き回っており、その時に夢をみます。(毎晩、色々な夢をみてるはずなのですが、朝起きると忘れてしまっているのでしょう) 子どもの頃には、単純な夢をみますが、大人になってからの夢は複雑で、非現実的な物が多く不可解なようです。古代から夢は人間にとって不可解で、また非常に興味深いものであったようです。「夢のお告げ」や「夢占い」がされていましたが、それは単なる「占い」であり「精神分析」とは違うものです。精神分析にとって「夢」とは「意味を持つメッセージ」なのです。そのため夢を解釈するには、夢を見た人物の「個人史」を知ることが重要な意味を持ちます。フロイトの『夢判断』が出版されたのは1900年ですが、その著作の中で彼は、「古代の本から多くのものを学んだ」と印し、紀元2世紀の『アルテミドロスの夢の書』



について述べています。今から 1700 年以上も前、夢に関する解釈の仕方はあまり進化をしていないようです。

精神分析とは、19 世紀末から 20 世紀初めに S. フロイトによって築かれた学問です。それ以前から人間の心に「意識」と「無意識」の領域が存在する事は知られています。古くは古代エジプトやギリシャ哲学の世界から、近世における音楽や絵画、芸術や哲学の世界まで広がって行き、芸術作品の一部は、本人の無意識の中から生まれてきます。S. フロイトは切手のコレクターでしたが、他にも「古代遺物の収集」をしています。小さな彫像を 2,000 個以上集めていたようです。（置き場所には困った事でしょうね！）当時は、それほど高価なものでもなく、法律での規制も少なかったのでしょうか。彼が



古代遺物の収集に情熱を傾けたのには、それなりの理由があります。彼の著した精神分析の治療技術の中に「古代の埋没都市の発掘調査」のようなものと述べていることから、現在の症状から心の層を一つ一つ掘り返していき、幼児期の体験を探り当てる作業に重ねあわせている様子が伺われます。

心理学の歴史をみると、動物の研究で得られた内容を人間に当てはめたものも多く見受けられます。「行動主義心理学」といわれる中では、「人間も動物の一種だ！」という発想のもとに立ち研究がされています。ロシアの I. パブロフが『犬』を使って行なった「条件反射」などが有名です。（ライくんのご先祖様かも？）他にもネズミを使った実験や、猫やサル、鳥類の観察、野生動物に育てられた人間、フランケンシュタイン？（ちょっと行き過ぎです（--；～*@\$&%#¥*！）

精神分析からすると、「人間と動物の差異はどこにあるのか？」という事が研究の対象になっています。そこで分かってきたことは「動物は本能に従って生きている」しかし「人間の場合はそうではない！」ということです。人間でも「食欲や性欲」は二大本能であるとか「母性本能」などが取り上げられますが、『本能のままに生きる』ことはありません。本来働くべき本能が『機能不全状態』にあるという、生物学者の説では「人間の胎児は未熟児の状態で生まれてくるから、本能が壊れているのだ」とされています。本能が壊れていると、動物は生きていけません。しかし人間の場合は、「機能不全」の部分を「心」の働きで補っているのです、自然の中で生き延びていく事が出来たのです。そのように理解すると「心」というものが「意識」と「無意識」に分かれており、さらに「自我というものが形成されていく」という説明は十分に納得できるでしょう。

以前にも記していますが、フロイトの扱う患者には「神経症」の人が多く、それは狭い



意味での『心の病』のひとつで、他者とのコミュニケーションをとる事（言葉を使つての治療）が有効だとされています。神経症には「ヒステリー」や「恐怖症」、「強迫神経症」などがありますが、病気ではないのに病気と思ひ込んでしまう「心気神経症」や不安を感じる「不安神経症」などがあります。（タツノオトシゴは「不安神経症」？）それ以外の『心の病』では「統合失調症」や「そう鬱病」、いくつかの要因が混在する「境界例」等がありますが、これらの場合は他者とのコミュニケーションをとることが難しいのです。（C.Gユングの扱ったのは、こちらの分野の患者が多かったのです）

『心の病』と言っても色々な種類があり、脳の機能が解明される事で新しい発見や今までの学説の裏付けがニュースになります。 次回をご期待ください…！！